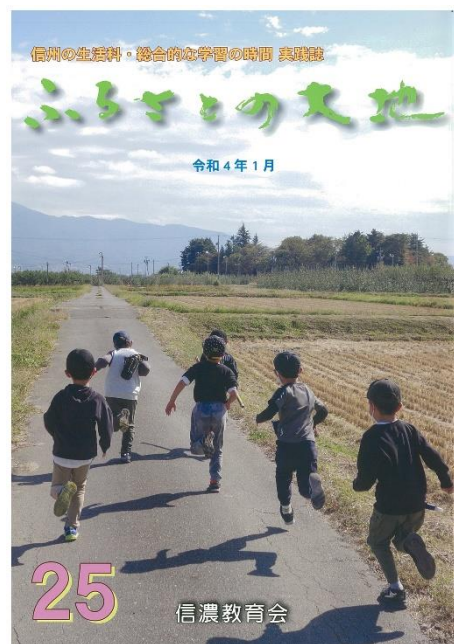


## こども達の主体的な学びを求めて

「ふるさとの大地」という著書をご存じでしょうか。信濃教育会より出されている本です。その「信州の生活科・総合的な学習の時間 実践誌 25号」には、村田結子先生（飯田市立伊賀良小学校教諭）の実践が掲載されています。この実践をご紹介します。（同冊子 20p～29pに掲載）

1年生の生活科で「あさがおの栽培」という活動があります。非常に定番の活動で、多くの学校で行われています。活動の流れもほぼ決まっています。「あさがおの種をまく→水やりと観察日記作成→（おしぼなや色水遊び）→種の収穫→茎の部分を使ったリースづくり」多くはこの活動パターンで、春～初冬にかけて行われます。村田先生は、子ども達の学びについて「困ったことがあるとすぐに教師に頼り、教師との関係のみで解決しようとする傾向がある」と分析。その改善の手立てとして、「友達とのかかわりを大切にすること」「子どもの気づきを取り上げ授業展開に生かすこと」を考えました。では、実際の活動では、どのような子どもたちのかかわりや姿が見られたのでしょうか。活動の順を追いながらみてみましょう。



### (1) あさがおとの出会いの場面

…2年生が昨年収穫したあさがおの種をプレゼント。プレゼントのメッセージを取り上げて、アサガオの栽培に児童の気持ちを向ける（教師；活動への動機づけ）

### (2) あさがおの種をスケッチする場面

…種の中身を想像させ自由に描かせる（教師；児童の様々な発想を引き出す）

### (3) あさがおの種をまく場面

…児童達は、早く生えてくる呪文を唱える（児童；開放感に満ちた子ども相互の交流の機会）

### (4) 観察場面①

…「つるが伸びすぎて、絡まっちゃう！」というある子の訴え→「第1回あさがおさん研究会」を開催→対策として支柱を立てることを確認する

【教師の振り返り】…(4)の場面での支援を振り返り、以下のようにまとめています。

⇒「私は計画通り、全員が支柱を立てて育てるという選択になるように方向づけしてしまった」そして、具体的に以下のラインボックス内のことを反省として挙げました。

- 「絡まったつるを切る」という児童の考えを教師が理由を読み取ることなく修正してしまった
- 子どもたちに考えさせようと思い、話し合いを始めたが、結局教師の予定した内容に活動が進むように方向づけていた
- 教師の意図から外れた考えの中にある、子どもの想いに寄り添えなかった

### (5) 観察場面②

…「葉が黄色くなっちゃった！」というある子の訴え→色が変わってしまった原因を考え合う→再度観察→訴えた子以外のあさがおも同じことがみられることを再発見→お互いのやり取りから、栄養がいかなかったために色に変色したという結論を導き出す（児童；友達どうしで、考え合

い解決できた経験)

## (6) 種つみの場面

…「まわりが緑のものも摘んで良いか？」という疑問→既習経験(葉の色の変色)から、「まだ緑色のは、栄養がついていて、茶色のはもう種に栄養が全部入っている。茶色のを摘めばよい」という意見が出て、みんなで共有する。(児童；友達どうして、考え合い解決できた経験)

## (7) つんだ種の観察場面

…種の様子に疑問を抱く→「たねぼうず」研究会を開催→友達から出された意見について図書館の図鑑で調べる子どもたちが出現！(児童；自分が納得できるまで追究)

【教師の振り返り】…「だれかがこうだよと言えば、素直に納得し、それ以上掘り下げようとしてこなかった子どもから、自分で調べる子どもへの変容→(教師；主体的な学びを獲得していると実感)

## (8) あさがおの命に思いを寄せた発展的活動場面

…「あさがおが、枯れちゃうのは悲しい！」という子どもたち→…これまでの経験(たたき染め)を生かし、行燈づくりに挑戦(児童；育てたものに対する愛情の深まり)

さて、このあさがおの栽培活動ですが、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿をもとに子ども達の育ちを考えてみると、様々な部分に10の姿に関わる育ちが伺えます。例えば、観察から問いをみつけ、答えを導く場面では、自然との関わり、思考力の芽生え、共同性、言葉による伝え合い、(8)の場面では、生命尊重、豊かな感性と表現のように。令和3年3月、信州幼児教育支援センターより「園・小接続カリキュラムの開発(理論編)」が出されました。おそらく多くの先生方がご覧になったことと思います。このリーフレットの冒頭で、センター長の長野県立大学太田光洋先生は、「学童期の学びはそこに至る乳幼児期に生まれた学びの土台となる力を基盤として、発展的な連続性をもって進んでいくと考えられます。」と述べられています。この言葉の中で「発展的な連続性」という言葉が目を引きまします。園小連携で考えなくてはならないのは正にこの「連続性」と言えます。

今幼児教育では、「子どもの主体的な学びの育成」に向け、「遊び」を大切に考えています。小学校では、国語や算数などの教科の授業があり、園とは異なったカリキュラムで教育が行われています。しかし、主体的に学ぶ力の育成は双方に求められているものです。そしてその主体的に学ぶ力の礎を築く役割を園が担っていることへの責任とプライドを大切に、保育者として研鑽を積みたいと思うのです。

私が中学校の理科の教員として勤めていた時のことです。研究授業(園の公開保育のようなものです)がありその授業者になりました。当日の授業では、無色透明の液体を入れた2つのビーカーを準備し、加熱して温度の上がり方をコンピュータで測定し画面に表示しました。2つのビーカーの液体の温度変化には時間と共に差が出てきます。そこで生徒にどうして温度の上がり方が違うのかを考えさせ、実験で検証するというものでした。当然ながら火力や液体の量、入れ物の材質には違いはありません。私は、「液体の違い」にすぐ気づくだろう。だから生徒の反応から、「物質により、温まり方には違いがあるのか、調べてみよう。」と課題を据え、実験をする予定でいました。ところが、ある生徒(仮にA生とします)が、「ビーカーの中の温度計の位置が違うため、温度の上がり方が変わったと思う。」と発言したのです。この時、私の頭には、「物質の違いによる温度変化の違い」という結論に向けたシナリオがありました。そのため、この生徒の考えを受け止めることができませんでした。授業での結論は、「物質の種類により、温まり方には違いがある」と教師の意図した通りのものにはなりましたが、その後の研究会では、A生の願いを受け止め、結論には結びつかない条件でもやらせてみると良かったのではないかとの意見をいただきました。

正に村田先生が、あさがおのつるが絡んでしまうことを解決するために、「支柱を設ける」という教師としての願いがあり、そこに向けて子ども達の考えを絞っていった場面と重なるなど感じました。先生方には、同じような経験はないでしょうか。自分の意図しない方向に物事が進むと、私たちはどうしてもその後の展開が予測できなくなり、不安になってしまいます。しかし、子ども達はそんな不安よりも、好奇心・追究心をもって突き進む存在です。子ども達にとって試行錯誤できる時間の確保、そのための保育者としての工夫が大切ですね。